

子どもたちの学び

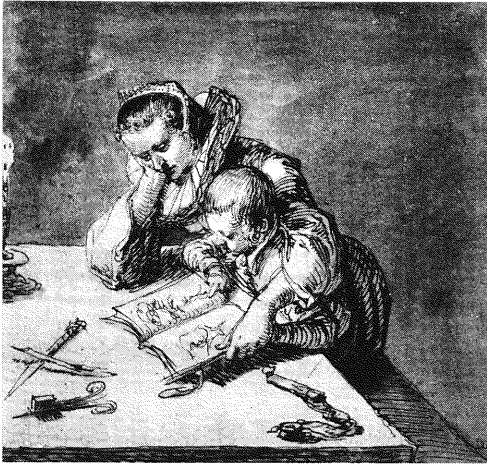
—十七世紀オランダ絵画が伝える教育の姿—

小林 頼子

教育を語るとき、オランダ語では二つの言葉を使い分ける。一つは、身体を育て、しつけをする *opvoeding* (動詞形は *opvoeden*)、もう一つは、知的な教育を授ける *onderwijs* (動詞形は *onderwijzen*) である。幼児の保育には前者、中等教育あたりから上の教育には後者が使

われる。初等教育は、両方の要素を兼ね備えているためか、話の内容によりどちらかの言葉が選択されるようだ。今回は、その二つの局面のうち、初等教育開始前後から施される *onderwijs* の状況を絵画のなかに探ってみたいと思う。

ジャック・デ・ヘインⅡ世の素描（一六〇〇）（図1）にも明らかなように、十七世紀オランダでは、幼い子どもも勉強の相手はまずは家庭を守る者・母親の仕事とみなされていた。机の前に座り、頬杖をつき、子どもの背中にやさしく左腕を回す若い母。子どもの繰る冊子の右頁には木、左頁には牛が見える。二人は画家の妻と息子。机の上にあるのは画家のペンとペンケース。とすれ

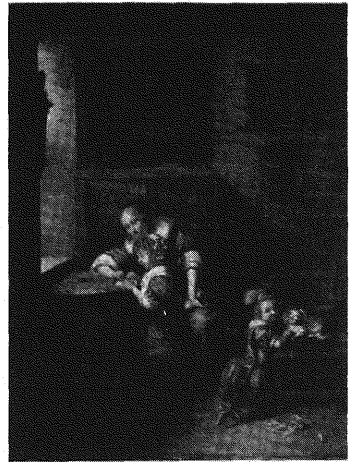


1 ジャック・デ・ヘインⅡ世《母と子》、
1600年頃、素描、ベルリン、国立版画収集室

ば、彼らが見入っているのは父親お手製の絵本とでも呼ぶべきものになる。最初の挿絵入り教育読本がコメニウス（一五九二—一六七〇）によって刊行されるのはようやく一六五八年のことだが、デ・ヘインの家族は、その雛形ともいえるべきものを勞せずして手に入れ、利用できたのである。ちなみに、画面左端の机上に灯るロウソクは、すでに日が落ちた後の静かな学びの時間をほのめかすとともに、闇に灯る英知、つまりは教育の力の徴ともなっている。いまでもよく見かけるこうした母と子の学びの情景に、さらに一歩踏み込んで、素質、教育、訓練という、古代・ルネサンス時代に遡る学習の二つのプロセスを読み取る研究者もいる。その場合、母はすべてを導く本性を体現することになる¹¹⁾。

幼児教育における母親の役割は、カスパル・ネツチエルの作品（図2）にも明らかだ。窓辺の机で熱心に母に読み書きを教わる幼い女兒。窓から差し込む光は、デ・ヘイン作品のロウソクの光——英知の光——の代わりと見ていい。彼女の後方には、母に背を向け、犬と戯れる男

児。傍らの床の上には、彼の遊び道具である色刷りの絵、骨お手玉、独楽がころがっている。外からの力が加わらなければ、止まっている独楽は静止したままだし、回っている独楽もやがて動きを止める。母が働きかけて教育してこそ、子どもは色刷りの絵を読本に代え、お手玉をやめ、よき道へと導かれる。それを拒めば怠惰の道に堕ちるほかない。学んでいる女兒の上に画中画《モーセの青銅の蛇》、相変わらず遊び続ける男児の上に地図が掛かっているのは偶然ではない。前者はキリスト磔刑の予型として聖なる世界を、後者ははかなく潰える世俗



2 ネッチェル《母の教え》1669年頃
ロンドン、ナショナル・ギャラリー

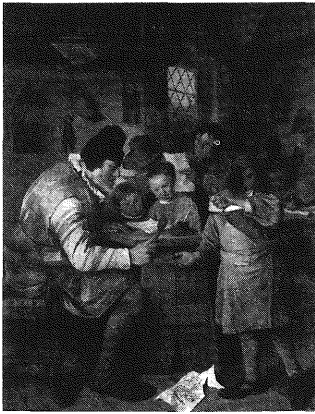
の世界をほのめかす²⁾。人は学習を通じて真理に行きつき、怠惰ゆえに七つの大罪の一つを犯すのである。

十七世紀当時のオランダでは、三十二パーセントの女性に書字能力があったと推測されている。読む能力だけを考えれば、この数字はさらに飛躍的に大きくなる。

デ・ヘイン、ネッチェルが描いたのは、服装から見て、中より上の層の女性、つまり子どもに読み書きを教えるくらいなら苦もない母親たちと見ていい。とはいえ、親の力の及ぶのは子どもが幼いうちのこと。ある程度以上の年齢になれば、子どもの教育は専門の教育機関である学校に任さざるをえなくなる。ちなみに、十七世紀オランダでは、五―十四歳までの子どもの就学率はなんと六十五パーセント。この数字は、他のヨーロッパ諸国に比べ相当に高い。プロテスタントを信仰する国として、「神の言葉にかえる」こと、すなわち聖書に書かれた言葉の重要性を重視していたため、どうあっても信徒には読み書きの基本を教えておかねばならなかったのである。商業国で生き抜くため、日々の暮らしの中で、帳簿

や契約書を確認しなければならなかったことも、その状況に拍車をかけたことだろう。オランダで初等教育が義務化されるのはようやく一九〇〇年になってからだが、そんな事情を抱えていたせいか、オランダ共和国が成立した十六世紀末頃には早くも全土に初等教育を授ける学校が設けられていた。³⁾

その初等教育の様子をヤン・ステーンの《村の学校》(図3)に見てみよう。そう広くもない部屋の壁に、ランプ入れ、砂時計、水(ワイン?)、差しが掛けてあり、ニツチには液体の入ったフラスコと瓶、上方の棚には数



3 ヤン・ステーン《村の学校》、
1663-65年頃、ダブリン、アイル
ランド国立美術館

冊の本、紙の束が置いてある。ランプ入れは子どもたちがカバン代わりに使っていたもの、本は教師の常備品、紙は生徒に配布するものなのだろう。どうやら、教師の自宅が、ひととき、学校に姿を変えたようである。黒い帽子をかぶり、こわそうな顔をした先生は、子どもたちが並ぶ机の前に斜めに座っている。彼は、右手に持った木製ヘラで前に立つ少年の右の掌をしたたか打っているところらしい。体罰を食らった少年は、左手で涙をぬぐい、ペソをかいている。原因は、破けて、二人の間に打ち捨てられている紙にある。少年は、課題もせずにはじらず書きをし、挙句の果てにもらった紙を破いてしまった。あるいは課題はこなしたものの、できが悪かったのか、いい加減だったのか。いずれにしろ、教師のお気に召さなかったことだけは確かだ。机の向こうでは、同じ体罰が待っているのをおそれるか、自分は何とかパスできると踏んでいるのか、何とも複雑な表情の少女がノートを前に広げて、自分の番を待っている。彼女の隣の幼い子も同じ思いで気がでないようだ。彼女の後ろに立

つ少年は、帽子を目深にかぶって熱心に課題を読み直し、最後の点検に余念がない。もう一人の少年は、不幸にも叱られている子ども方を自信ありげに見やっっている。そして、この一団の後方には、机に向かつてしきりに羽ペンを動かし、熱心に課題に取り組む子、それを眺める子、壁のスレートをとろう（あるいは壁に掛けよう）とする少年の姿が見える。

教師が生徒に基本的な読み書きを練習させ、算術の課題を出し、公教要理を暗誦させ、その成果を一人ひとりチェックする。当時の初等教育の現場を髣髴とさせる貴重な視覚資料である。できの悪い子どもへの容赦ないお仕置きはなかでも注目に値する。カルヴァン派は、子どもには人間の罪深さが本性として入り込んでいるという子ども観に立っていた。そのカルヴァン派の流れをくむ学校で、子どもが業として背負った罪を教師が厳しい規律、体罰で矯正したとしても不思議はない。子どもたちの暗誦カリキュラムにも入っていた旧約聖書箴言（一三・二四）の言葉、「鞭を控えるものは自分の子を憎む」

は、その際、さぞかし心強い支えとなったことだろう。

ただし、すべての親たちが体罰に合意していたわけではない。ある十六世紀末の記録は、親が文句を言うので必要な体罰ができない、という教師の訴えを紹介している⁵⁾。十七世紀の人氣の著述家カツツも、カルヴィニストの立場にありながら、「若い心を力で抑え込むのは望ましいことではない。子どもは寛大に扱ってやるべきだ」と書いている⁶⁾。教師が怒りに任せて子どもを鞭打つといったこともあり、こんな言葉が出てきたのかもしれない。こうした体罰に眉をひそめる人々の声は、しかし、体罰肯定の滔々たる流れのなかにあつてあくまで少数意見にとどまっていた。

寄り道になるが、体罰を与える側の教師の資質についても少し触れておこう。教師の選任に配慮が欠けている、「十三ギルダー払えば誰でも学校が開ける」といった苦情は、すでに十六世紀末から聞こえていた⁷⁾。一六二〇年の記録は、長年教師を務めている者のなかに実は字が読めない者、算術がほとんどできない者、そもそも教

える気がない者がいるとの嘆きが記されている。十七世紀半ば頃になると、自宅で子どもたちに教えるには教会の試験をパスし、しかも、ときに教会の監査を受けることが義務付けられたが、それでも、教師が子どもを墮落させるといった風評が絶えることはなかった。いわく、宗教心が足りない、タバコを吸う、悪所通いをする……

そして、なかでも大きな批判が集まったのが教師の飲酒癖⁹⁾。そうだとすれば、《村の学校》(図3)の壁にかかるのも、水差しではなく、ワイン差しということになる。

とはいえ、教師の方にも同情すべき事情が十分すぎるほどあった。生徒が集まらない、カリキュラムの了見が狭い、労働時間が長い、教室内が騒がしいなど、教師をめぐる待遇・環境は劣悪をきわめていた。にもかかわらず年収はたった百ギルターほど、つまり単純労働者の年収の二分の一にも満たなかったのだ。だから、年来の教会との付き合いから墓堀りなどの副業に従事したり、生活保護を受けなければ食っていけなかった¹⁰⁾。これで優秀な人材が集まったら、むしろ驚きとすべきだろう。世

間はしつけや教育の重要性を認めてはいたものの、なお教師をまっとうな職業とみなしていなかったのだ。スティーンの作品に限らず、当時の絵画に描かれた教師の姿にいつでもどこか胡散臭さがつきまとうのは、そんな背景があつてのことなのだろう。

十二歳で初等教育を修了すると、経済的条件に恵まれ学び続ける意思のある男児には、古典の教養を身につけるラテン語学校、そして大学というさらなる勉学の道が開けていた。十七世紀末の数字だが、大学進学は四〇人に一人、率にして二・五パーセントに上ったといわれる。一方、女兒は、たとえ能力があろうと、裁縫学校かフランス語学校、あるいは家庭教師について勉強を続けるしかなかった。当代きつての才女アンナ・マリーア・ファン・スヒュールマンについては、例外措置がとられ、ユトレヒト大学の聴講が許されたが、別室から壁越しに講義を聴くという、苦肉の条件つきだった¹¹⁾。

詩人ヤーコプ・カツツの著書『結婚』に添えられた図



4 ヤーコブ・カッツ『結婚』（ハーグ、1632）より

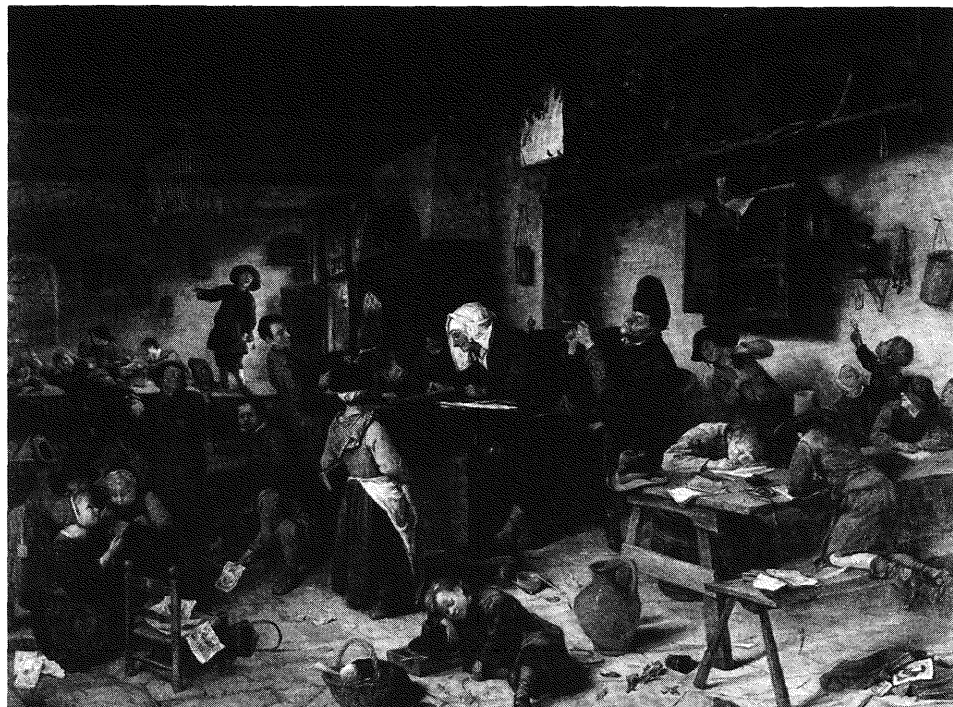
版（図4）は、そうした男女の教育の差の端的な例証となろう。¹²⁾ 一家七人の団欒の図であるが、父親は膝に本を置き、読み書き・幾何学・美術の基礎を学ぶ二人の男児の相手をしている。これに対し、乳飲み子に授乳する母の傍らでは、姉がレースを編み、妹が人形ごっこに夢中だ。男児は知的好奇心を育てられ、女兒は家庭の仕事を教え込まれる。西洋の絵画の伝統では、男性が陣取る画面右側（向かって左）が高等な位置、女性が陣取る左側（向かって右側）が劣った場所とされていた。とすれ

ば、男女の教育の差にはジェンダー的視線の差が関係していることになろう。

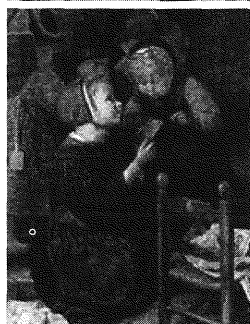
この図を十七世紀の教育者デスワーフの以下の言葉と重ね合わせてみよう。

「このこと「親は子供の性を考慮して職業を選ぶべきこと」には注意しておく必要がある。なぜなら、共和国やコミュニティーのあらゆる重要なポストについて仕事をすることは男性たる者の義務であり、この義務が家族に利益をもたらしてもするからである。他方、女性の子供の面倒とか家事といったもつと普通の仕事に責任を持ち、子供たちに手をかけ、家の中のことが万事つつがなく運ぶよう目配りをしなければならない」¹³⁾

男と女には明らかに異なる社会的役割りが期待されており、それ故にこそ男と女で教育機会に差がつけられていたのである。アリストテレス、聖書、ガリレオ——女性が男性に劣る性だという言説が連綿と繰り返されてきたとすれば、その差は、単にそれぞれの性に備わる特性



5 ヤン・ステーン《小学校》、1670年頃、エディンバラ、スコットランド国立美術館



5-1 (上)、5-2 (下)
図5 細部



6 ラファエロ《アテネの学堂》、1508-11年ローマ、ヴァチカン、署名の間

を生かした結果などとはいいがたい文化的「所産」の賜物というべきだろう。

こうした諸々を念頭に置きながら、ステーンが描く学校の様子をもう一つ眺めておこう(図5)¹⁴⁾。広々とした部屋の中で思い思いに課題に取り組む子どもたち、年少者の面倒を見る年長者の姿が生き生きと描き出された優品である。課題ができあがり、教師の前に並ぶ子どもたち。白い頭巾の女教師は、キセルで間違いを指摘し、できが悪ければ右手の鞭で容赦なく子どもに体罰を加える。奥の方では、勉強なんかクソ食らえとばかりに、悪童どもの悪ふざけが延々と続く。彼らには、後で厳しいお仕置きが待っているはずだ。

ステーンは、この無秩序な学校にさまざまな仕掛けを張りめぐらしている。男教師の羽ペンを削る仕種は勤勉を意味する。彼の胡散臭さといかにも対照的だ。彼の後ろ、戸棚の脇には昼だというのにランタンが灯されている。その脇には眼鏡を外した知恵の鳥ミミズクの姿が見

える。「ミミズクが見ることを拒めば、明かりや眼鏡も役立たず」という諺を思い出させようというのだ。たとえ才能に恵まれていても、やる気がなければ教育は無力なのだ。さらに、作品のところどころに——たとえば、画面右端の三人(図5の1)、前景真ん中の眠る少年(図5の2)——、ラファエロの描く学問の殿堂、かの《アテネの学堂》(図6)の細部が借用されている。そして画面右下には打ち棄てられたエラスムスの肖像画。絶望的な子どもたちの教育の現場と理想のアカデミーとオランダが生んだ偉大なる教育者との重ね合わせに、教育に対するステーンのユーモアいっぱい、大らかな懐疑と共感が読みとれる。

大人も、そして子どもたちも、しつけ、教育の過程で、通念と化した価値の体系の中に知らず知らずのうちに関り込まれる。その体系の外に出て、世界を別様に理解・判断し、新たな体系に思いを馳せるなど、おいそれとできることではない。そんななかであって、ステーン

の諧謔の視線には、文化的所産という偏見を相対化する強韌さがある。教育の力と危うさ。ステーンは、画家としての創意を通じて、実にやすやすと教育の裏表を見せつけているようだ。

(目白大学)

註

- 1) *Jacques de Gheyn II als tekenaar 1565-1629* (exh. cat.), Museum Boymans-van Beuningen, Rotterdam, 1985-86, p. 66
- 2) Majorie E. Wieseman, *Caspar Netscher and Late Seventeenth-century Dutch Painting*, Doornspijk, 2002, p. 220-30
- 3) 小林頼子ほか訳著『ヤン・ライケン 西洋職人図集』、八坂書房、二〇〇一、一四三頁
- 4) *Ibid.*
- 5) *Mirror of Everyday Life. Genreprints in the Netherlands 1550-1700* (exh. cat. ed. by E. de Jongh et al.), Rijksmuseum, Amsterdam, 1997, p. 290
- 6) *Jan Steen. Painter and Storyteller* (exh. cat. ed. by H. Perry Chapman et al.), National Gallery of Art, Washington, 1996-97, p. 254
- 7) M. F. Durantini, *studies in the Role and Fraction of the Child in Seventeenth Century Dutch Painting*, (California, 1979, p. 193
- 8) *Von Frans Hals bis Vermeer* (exh. cat. ed. by P. Sutton), Gemäldegalerie, Berlin, p. 301
- 9) *Ibid.*
- 10) 小林頼子ほか訳著『ヤン・ライケン 西洋職人図集』(註3) p. 143
- 11) 小林頼子『フェルメールの世界』、NHK出版、一九九九、一七一頁
- 12) *Jacob Cats, Houwelijk, Middelburg, 1632*
- 13) 小林頼子『フェルメールの世界』(註11) 一七〇頁
- 14) 本作品の細部にうつづは *Jan Steen. Painter and Storyteller* (註9), p. 212に詳し。